
〇〇の〇〇が世界を救う

長まさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

〇〇の〇〇が世界を救う

【Nコード】

N7289Z

【作者名】

長まさ

【あらすじ】

遊戯王が好きなごく普通の高校2年生、石嶺山吾。

そんな彼が、突然世界を救う為にGXの世界に飛ばされた。

これは、そんな彼が大好きなコ〇ンの最終回を観る為に、無事元の世界へ帰還するまでを綴った物語である。

注：あくまで遊戯王の小説です（笑）

第1話（前書き）

タイトルの○には、テーマデッキの名前が入りますが、デュエルをするまでは伏せます。

第1話

「……嶺山……君？ 石……吾君？」

誰かが俺を呼んでいる、知らない声だ……誰だ、人の昼寝の邪魔をする奴は？

「ん？ ……ってうわっ！！」

聞き慣れない声の主を確認しようと俺が目を開けると、顔の目の前数センチの近さに綺麗な女性が居た。

「良かったー、やっと起きてくれたわね？ 石嶺山吾君」

何だこの人？

確かに、俺の名前は石嶺山いしみねさん吾だ。

しかし、何で俺の名を知っている？

そしてここは何処だ？

よく見たら一面真っ白だし、身体が少し浮いている。

「アンタ、一体何者だ……？」

俺は率直な疑問を口にする。

「私？ 私は……神よ」

「僕は新世界の神になる……の、神か？ (笑)」

一回言ってみたかったが、顔見知りの前じゃ痛くて言えなかった、伝説の名台詞を言ってみる(笑)

「誰が○ラよ!? 誰が月と書いてラ○トと読むのよ!?!」

「おおー、綺麗なノリツツコミ(笑)」

スゲエー、百点満点な答えが来た(笑)

こりゃ良い(笑)

「私で遊ばないで、真剣なんだから!! 貴方の世界の危機なのよ?」

「いや、いきなり出て来て、神よ言われて信じれると思うか? まあ、新世界の神(笑) なのはこの際認めるから順を追って話してくれるか? まず、ここは何処なんだ?」

「何だか、凄く不愉快な言われ様ですが……時間が無いので簡潔に話します、ここは転生の部屋よ」

「……転生つて、よく小説なんかに有るあの転生か?」

「ええ、貴方は今から別の世界に転生するの」

「ハアー!? じゃあ何か、俺は死んだのか? まだ17だぞ?

コ○ンみたいに外車も運転してないし、○姉ちゃんみたいな可愛い彼女だつて居ないし、第一、大好きなコ○ンの最終回だつて見てないんだぞ!? さては、アンタ間違えて俺の事殺したろ?」

二次小説でよく見る転生モノ、読む分には面白いが、実際になるとパニクる。しかし、我ながら後悔がコ○ン関係ばっかだ(笑)

つてか、いつ死んだんだ?

「ちょ、ちょっと落ち着いてよ?

まず、貴方は死んでないわ。私が貴方の力を借りたくてここへ呼んだの」

「俺の力を借りたい?」

「そうよ……実はね?」

私と対をなす立場に有る死神が、貴方の世界の人間を一人、遊戯王GXの世界に転生させてしまったの……死神の事だから、間違いなく悪い入れ知恵をしてるわ。

このままその転生者を自由にしていたら、貴方の世界とGXの世界、2つの世界がメチャクチャになってしまう。だから貴方を呼んだのよ」

死神ってマジで居たのか……そんなもって、死神と対をなすって事は、この人は女神様か何かか？

「……つまり、その転生者は俺の知り合いか？」

「理解が早くて助かるわ……黒羽光行、貴方の高校のクラスメイトよね？」

「く、黒羽光行！？　そういえば、何日か前に行方不明になったって……マジかよ」

俺はその場に座り込む。それでも身体は浮いているが……とにかく、転生者がアイツなのは、それ程マズい事態なのだ。

「事の重大さは伝わったかしら？　貴方には、彼を止めて欲しいの。転生させたのが死神だし、このままじゃ何し出すか解らないわ……」

痛い程伝わりました（笑）

「それ、何か俺でなきゃいけない理由とか有るの？」

「大有りよ？　貴方、学校で唯一彼に勝てるんでしょ？」

なるほど、その言葉を聞いて一気に納得した。

奴、黒羽光行は俺の高校では名の通ったデュエリストだった。

父親がデカいカードゲーム会社を、母親がカードデザイナーをし

ていて、常に最新のカードが手に入る事も有るが、何よりプレイングタクティクスが尋常じゃないのだ。

「勝てるって……よく言つて互角だぞ？」

正直よく言い過ぎだ、俺と奴の戦歴は45勝55敗。10個の負け越し、互角ではない。

「他の生徒は誰一人勝てないんだから立派じゃない。とにかく、彼を止めて？」

「アンタの頼みは解つたから、俺にも質問させてくれ……さっき、アンタは俺は死んでないと言つたが、じゃあ俺が奴を止める事が出来れば、俺は元の世界に戻れるのか？」

「ええ、勿論よ？ 約束するわ」

「GXの世界に居た分、元の世界でも時間が進んで、例えば三年居たとして戻つたら成人になるとか無しだぞ？」

「……善処するわ」

何だその妙な間は……まあ、良い。アニメのGXは好きだ。

ヒロインは5・dsの圧勝だけだな？

アキ姉ちゃん最高、木下あ○み最高（笑）

最も、歴代最強ヒロインは杏子姉さんだが（笑）

「解つた、奴を止めれば良いんだな？ だが、具体的にどうすれば良い？」

「多少の変化は目を瞑るから、なるべくアニメの流れのまま、主人公達と卒業して欲しいの」

「そんなんで良いのか？……いや、意外と難しいか？」

「勿論、私も精一杯サポートはするわよ？ 貴方が望むなら、チ

ートドローもオリカも可能よ？」

「んなもん要らん、精々死神から命を守れ位だ。カードは俺が持つだけで充分……と言いたいが、強欲な壺と天使の施し、そして俺のメインデッキ関係の原作カードは貰おうか？」

前者2枚は元の世界じゃ禁止カード、ストックは無いので欲しい。メインデッキ関係のカードは最も欲しい、有ると無いとじゃ大違いだ。

「解ったわ、貴方のカードコレクションに追加しておくから確認しておいて？」

死神の件は大丈夫、任せて。

それじゃ、準備が整ったからそろそろ行ってくれるかしら？」

「解った、ちなみにアニメの何処から始まる？」

「一話の前、学科試験からよ？」

「ち、ちよつと待て、世界を救わせようって人間に、試験受けさせるか？」

「転生の時点で普通じゃないでしょ？ つべこべ言わずにさっさと

行きなさいっ！！」

「何だこれ！？ うわっ！！」

新世界の神（笑）がそう言うと、謎の球体に包み込まれ、俺は再び気を失った。

「新世界の神（笑）言うな！！」

続く……。

第1話（後書き）

こんな感じで第1話です。

話の中でも少し触れましたが、GXは話は面白いのですが、ヒロインがイマイチ：何故十代にアピールしなかった、明日香よ（笑）

それに、ヒロイン以外の女性キャラも、初代の孔雀舞様、5・dsのシェリーさんポジションが居なかった：同じ事二回言いますが、話は面白かっただけに勿体なかったなと（笑）

第2話（前書き）

妙に時間が掛かってしまいました。第2話です。

第2話

「ええ……、それ……、入学……、説明を……」

ん、何か声がするな？

新世界の神（笑）にGXの世界へ飛ばされたはずだが……

「試験は50問、1問2点の100点満点だ。合否は実技との総合で決まるが、学科で成績を残さないと実技で苦労するから頑張れよー？ では、始め！！」

（えっ、試験始まつちやったの！？）

目が覚めると同時に聞こえて来た試験官の開始の合図に、俺は慌てて問題用紙を捲る。

（あのアホ神、試験直前に放り込みやがったな！？）

本当に世界救わせる気有るのかと疑問を感じながらもまずは名前を書く、転生モノによく有る名前の書き忘れなんてミスはしたくない。

「さてと、問題の確認を……」

問・1

青眼の白龍の攻撃力を答えよ。

マジでこれなんだ、1問目……3000だな。

問・2

青眼の白龍の守備力を答えよ。

まあ、これも定番か…… 2500。

問・3

青眼の白龍の種族と属性を答えよ。

攻守も一緒に良いんじゃない……ドラゴン族、光属性。

問・4

青眼の白龍の攻撃名を漢字で答えよ。

中途半端に難易度高いな……えっと、滅びの爆裂疾風弾ほろびのバーストストリームだったな。

問・5

青眼の白龍3体を融合したモンスターの名前を答えよ。

青眼の負けフラグドラゴン……じゃなくて、ブルーアイズアルティメットドラゴン青眼の究極竜と。

その後、何と問30まで青眼の白龍関係の問題が続き(よくこんなに問題作れたな)問31から49までは元居た世界なら小学生でも知ってる様な問題だった。

(難易度無茶苦茶だな……ん? 問50だけ妙に文章の文字がデカくないか?)

そう思いながら問題を読んだ俺は、衝撃を受けた。

問・50

海馬コーポレーション社長兼、デュアルアカデミア創設者、海馬瀬人と、決闘街優勝者武藤遊戯。デュエリストとして上なのはどちらか答えよ。

「何だこの問題……」

(超個人的恨みじゃねえーか……社長、未だに王様に勝ち逃げ去れたの根に持つてるのか?)

そう思いつつ、俺は答えを書き込む。

(……武藤遊戯さん、って書いて大丈夫かな?)

当然の回答だが少し迷う。そして、この回答が後に俺を恐怖へ突き落とす事になるのだった。

「そこまで!! 回答用紙を裏返して待つ様に」

長かった、本当に長かった。こんな簡単な試験に90分も要らんだろう……70分は寝たぞ?

「1時間後より、学科試験の成績順に実技試験を行う。各自デスクの調整を行い、全力を出し切る様に。以上」

……そして、かれこれ1時間が経過した。

「それでは、これより実技試験を開始する!! 受験番号1番、三沢大地」

「ハイッ、よろしく願います」

(あれ? 1位が三沢のままって事は、何か間違えたのか?)

そんな思考を巡らせている内に、三沢は試験官に勝利した。

ちなみに、別段面白いデュエルでもなかったので割合させてもらう(笑)

「受験番号2番だが、学科試験の点数が同じ者が3名居る、よって

五十音順にさせてもらう。
受験番号2番、石嶺山吾

「はい、お願いします」

呼ばれたので返事をしてデュエルフィールドに向かう。

台に置いてあるデュエルディスクを左腕にはめ、デッキをセットして試験官に一礼。

そして、デュエルディスクを起……

「待て、その試験、この俺様が直々に行ってやる!!」

(この声、どつかで聞いた気が……)

そう思っていると、試験会場の屋根が開いて空から一人の男が降って来た。高度が下がるにつれて人影がハッキリして来る……ヤバい、社長だ。

「ふうん、貴様、石嶺山吾だな？」

パラシュートで俺と試験官の間に着地した社長が、アニメそのままの口調でそう訊ねて来る。

「はい、そうですが……何か？」

「貴様の学科試験の回答、見させてもらったぞ？ 非常に優秀だった」

あら、誉められた。もしかして怒ってない？

「……しかしだ、最後の問題の答えが気に入らん!!
この俺様より遊戯が強いとはどついう事だ!？」

……やっぱり怒ってらっしやる、ですよねえー？

「いや、どうと言われても……決闘街優勝者バトルシティと3位を比べてどちらが強いかと聞かれたら、普通は優勝者を選びますよ？」

だが俺は怯まない。何故なら、事実を書いたまだから。

「ええーい、黙れ！！ この俺様が遊戯より弱い等という事は有り得ん、貴様以外にも遊戯の方が強いと書いた奴が他に二人も居るのは気に食わんが、まずは貴様に身を持って俺の強さを解らせてやる。構えろ、貴様の試験の相手はこの俺だ！！」

何という展開、初デュエルの相手がいきなり社長とか……。

まあ、超楽しみだが（笑）

「……解りました、お受けします」

「フンッ、我が下部、青眼の白龍の強さの前に跪くが良い！！」

俺はさっき社長の乱入で起動し損ねたデュエルディスクを起動する。

「デュエル！！」

俺の実技試験が始まる。

第2話（後書き）

はい、そんなわけで主人公の入学試験の相手は我らが社長になりました（笑）

他の小説ではクロノス教諭や普通の教師と闘うパターンが多いのですが、それではイマイチオリジナリティーに欠けるのでこうなりました。

拙い文章ですが、今後もよろしくです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7289z/>

〇〇の〇〇が世界を救う

2011年12月31日02時46分発行